

長谷川四郎

ダンダン

海に落ちた話



筑摩書房

長谷川四郎

ダンダン

海に落ちた話

筑摩書房



913.6/ダンダン 海に落ちた話

著者略歴 1909年、北海道に生まれる。法政大学文学部卒。作家。著書に『鶴』『シベリア物語』『模範兵隊小説集』『ぼくの伯父さん』、それにちくま少年図書館『恐ろしい本』などがある。

筑摩書房 1972年初版
266pp/18.8cm/四六判



1972年5月25日 第1刷発行

著者 © ^{はせがわしろう}長谷川四郎

発行者 井上達三

発行所 ^{ちくましょぼう}株式会社 筑摩書房

101-91 東京都千代田区神田小川町2-8

電話 03-291-7651

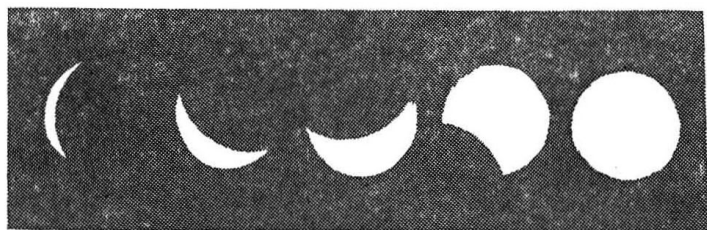
振替 東京 4123

印刷・明和印刷 製本・和田製本

8093-04403-4604

ダン
ン
ダン

海に落ちた話



この本のなかに書かれていること

海と山のあいだ、ほそ長い町で

まつりだ ワツシヨイ

神かくし ダンダンがいなくなった

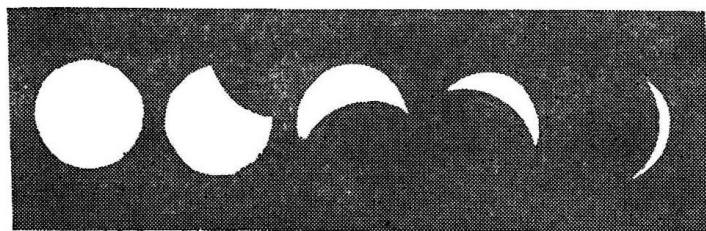
犬のころはわからない

引力のしわざ 落ちていく、落ちていく

はなうたまじりで

古典^{こてん}はおしえる——本ばかりが人生じゃない

地震^{じしん}のようなあらし 難破船からにげる



暴君と暴君のけんか 海の底には何がいる？

夜光虫光る海

人面の大岩

死人はくるしまない 死人の国で

魚やくにおい あばらやの親切

土地は地主のものじゃない ふしぎなぬしがいる

さびしい森

帰ったときと出ていったときとはちがう

都会へ ふたたび出発



そうてい
さし絵
はせがわしろ
う



町の本屋へ行くと、店員がいて

「やあ、ツン。元気そうじゃないか。」

「おじさん、こんにちは。」

すると店員がわらいだして、いった。

「ハ、ハ、ハ。アヒルのひよこがよちよち歩き、コネコの子っこにいったそうだ、クワツ、クワツ、クワツ。おじさん、こんにちは。いい天気だね。」

この町の人ではなくて、まだはたちになるかならないで、ちかごろどこからかやってきた男で、旅の、また、アルバイトの学生のようにだった。

ツンは本だから本をとりだして、ページをひらいて目にちかづけた。すこしばかり近視眼だった。それから、本をもどして、またべつの本をとりだし、ページをひらいて目にちかづけた。ミツパチがとんできて、じぶんのすきなミツをさがしているようだった。

そばで見ていた店員が

「マンガは、きらいかい？」

そして、ふしをつけて。

山のあなたの空とおく

タム タム タム タム

たいこのリズムでダンスする

怪獣^{かいじゅう}住むと人のいう

「きらいじゃないけど、すきでもないわね。」

『人間の先祖』という本を、ツンはひらいていた。

「本読むの、すきなんだな。だがよ、本ばかりが、人生じゃないぜ。」

「それ、なんのこと？」

「さっき、すばらしいニジが出ていたっけ。うたう大空の七人むすめだ。ツン、きいたかね？」

「なにいつてんのよ。きょうは、雨なんかふらなかったし、ニジが出るわけ、ないでしょ。」

「そうだったかな。」

店員がわらい、ツンもわらった。

「どれにしようかしら。」

またべつの本へ、ツンは手をのばした。

「トマト料理りょうりのいろいろ、というのは、いかがで？」

「トマトはいいわね。だいすき。」

「いまはトマトの、出さかりだ。」

「でも、トマト料理なんて、あるのかしら。あたし、なまで、むしやむしや、たべちゃうけど。」

「この世のなかにはな、ツン。料理できないものなんか、ないんだぜ。おれは、料理店にいけば、一流のコックなんだ。」

店員が、えばった。

「あら、そうなの。」

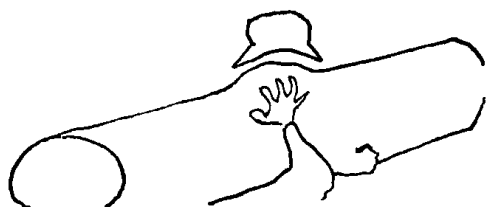
「なにに、いたします？」

こんどは給仕人きゅうじにんに、なりすましていた。

「そうね、なんにしようかしら。」

本屋の店先から、道路をへだてて、海がひろがっていた。海には一そのの船がうかんでいて、材木をつみこんでいた。

よくはれた夏の天気。トラックがいたりきたり。通行人のむれ。カラカラカラと、機械きかの音。あいまあいまに、エンヤコラ。はたらく人びとの、かけ声でした。



「マンガにしろよ、ツン。」

「怪獣^{かいじゅう}の？」

「そうなんだ。かおはライオンで、
ひたいにはサイのツノ。からだはイノ
シシで、手足としっぽはトカゲなんだ。
でっかいぜ。」

「つまんないの、そんなの。」

「おれが、つくったんだ。」

「そうらしいわね。」

「タム、タム、タム、タム。」

むねをたいこにして、店員はたたいてみせた。

「おじさん。」

ツンがいった。こうとしか、呼びよ
うがなかったから。

「はい。」

「こないだの本、おもしろかったわ。」

「なんだったつけ。」

「ロビンソン・クルーソー。」

「そうか。文庫本で四さつだったな。」

「うん。」

「もう読んじまったのか。」

「そう。」

「するてえと、こんどは、ガリバー旅行記だな。」

「ガリバー？」

「ロビンソン・クルーソーは、海で難破したはなしだが、ガリバー旅行記も、海で難破したはなしだ。難破して、それから、それから……。」

「それから、あとはひみつ。読んでごらん。そうでしょう？」

「そう、そう。」

「でも、こわいわね、台風の海。防波堤にぶつかって、ドッカーン、ドッカーン。」

「——精神自由の人間は、永遠に海を愛す。」

片手をさしのべて、詩人きどりで、店員がいった。

「そうね、その、ガリバーにしようかしら。」

すぐさま、店員は、なんだか手品師てじなしのような手つきで、一さつの本をとりだしてきた。さし絵がいっぱい。色とりどり。大きな本だった。

ツンは、ためらった。エプロンのポケットに、はいっているお金が、たりなかったから。『人間の先祖』ならば、おつりがきたが、やっぱり、ガリバーのほうに、ひかれたので、もっとお金をためてから、このつぎに来て、ガリバーを買おうかと、考えた。

店員は、それをみてとった。

つぼにいけた切り花ならば

枯かれたらすてましょ

本は読んだらとつときましょ

また読むこともあるからな

口のなかで、ぶつぶつ、こうつぶやいて、それから

「トマト料理りょうりのいろいろ、にしなよ。」

「そうね、それ、おいくら。」

「二百円。」

エプロンのポケットには、かっきり二百円、はいつていた。

「それ、ちようだい。」

「へい、まいどありがとう。」

本をつつみはじめた。つつんでいるあいだに、ツンが

「でも、トマトは、いま、たかいわ。」

「ちきしょう。出さかりのくせに、たかいとくる。あんまり、たかかったら、かっぱらって、くるんだな。」

と、本をわたしながら、店員。

「読むだけでも、いいわよ。」

「ぼかな。ダンダンに、たのめ。やつは投げなわの名手だろ。やおやの店から、かんたんなものだ、トマトひとかご、しょっぱいてくるさ。」

「そうね。ガリバーも、ダンダンに、たのめかしら。あ、もう時間だわ。ごはんのしたく、しなくっちゃあ。」

わらってツンは、本をこわきに、こぼしりに、かえっていった。

「おれにも、トマト料理、食わしてくれよ。」

わらって店員が、うしろから、呼びかけた。

1

月がでたでた月がでた　ヨイヨイ

三池炭坑さんちたんこうのうえにでた

あんまり煙突えんとつがたかいので

さぞやお月さん　けむたかろ

サノヨイヨイ

とつくに三池炭坑は閉山へいざんになったが、この炭坑町からうまれた、このおもしろいうたは、生きていて、ぜんこく津浦つぽう浦うらにひろまって、みんなからしたしまれ、うたわれているのであって、あのときも、あの海にめんした、小さな町で、そう、人口九千くらいも、あったろうか、あの町で、人びとがあつまって、うたっていた。

ドンドコ、ドンドコ。

そして小学生たちは、おんなじふしまわしで、うたっていた。

海は広いな大きいな ヨイヨイ

月がのぼるし日がしずむ

海は大なみ青いなみ

いってみたいな よそのくに

サノヨイヨイ

ドンドコ、ドンドコ。たいこの音。

町はお祭りの、さいちゅうだった。

その年は、もう何十年もむかしから、ぱったり、とれなくなっていたニシンが、どういう風のふきまわしか、それとも、どういう潮しほのながれまわしか、いきなり、どっさりとれて、浜はべはニシンの大群たいぐんで足のふみばもないくらいだった。

また、夜のうちに、でっかいクジラが砂浜にあがってきて、朝早く、人びとがおきて出てみると、そこにごろりと、クジラがよこたわっていることが、一度ばかりか、三度もあった。

まえは海。うしろは山。

この山から切りだされる材木が、とおくの大きな都会の、地下鉄工事の現場から、トンネルのわ

く組用として、注文がきて、切りだすそばから、すぐ売れた。

沖^{おき}には、この材木をつみこみにきた貨物船が、なんそうもうかんでいた。

その年の、この町は、けいきがよくて、年に一度の、こんぴら神社のお祭り^{まつり}も、とくべつ、にぎやかだった。

「わしゃ、かんけいない。わしの小屋は、村はずれに、あるでの。」

という、ふるいロシアのことわざが、あったそうだが、その町のずっと町はずれにも、いっけんの小屋が立っていて。

その小屋は

「けいきがよいなんて、わしゃ知らん。」

と、いつているようだった。

もう夜だった。

日に七回、となりの町との往復バスが、いったりきたりする道路であって、ちょうど日照^{ひで}りつづきの八月。バスがとおるたびに、もうもうと土ほこり、まいあがり、小屋のまどガラスがくもりガラスのようになっていて、このまどの外から、とおりすがりに、ふとのぞいてみると、小屋のなかで、ひとりのおやじが、酒をいっぱい、のんでいるようなけしきだった。